

2017年4月

「コリーグ」50号 目次

巻頭言（1～2）センター長就任のご挨拶（3）共同利用・共同研究拠点および戦略的研究プロジェクトについて（3）HER2017開催告知（4）第六回日豪交流セミナー報告（5）第44回研究員集会報告（6）高等教育公開セミナー報告（7）学生シンポジウム報告（第3回）（8）2016年度の公開研究会（9）センター往来（10）新任者・離任者から一言（11～16）情報調査室だより（17）

巻頭言



インヴィジブル・カレッジと 国際共同拠点としてのセンター

小林 雅之

（東京大学大学総合教育研究センター教授）

広島大学高等教育研究開発センターについて、語りたことは多いが、ここでは2つに絞って簡単に披瀝したい。

一つは、インヴィジブル・カレッジのことである。ほとんどの研究者は、多くの研究会や共同プロジェクトによって支えられ育てられている。広島大学大学研究センター（以下センター）の矢野眞和先生と金子元久先生の研究会については、丸山文裕センター長の退職記念特集号に書かせていただいた。また、天野郁夫先生を初めとするフォーマルな共同研究や市川昭午先生の国立学校財務センターに関連する「インヴィジブル・カレッジ」のことは既に別の機会に紹介した（国立学校財務センター紀報2003年3月）ので、ここではそこにふれなかったことを簡単に紹介したい。

私の最初の就職先は広島修道大学だった。赴任する際に東京大学の院生の時の指導教官だった天野先生から、広島には広島大学のセンターがあるから、地方でもメリットがあると言われた。しかし、その時、そのメリットとは何か、まったくわかっていなかった。広島に赴任してしばらくして不承不承とは言わないまでも躊躇しながら千田町のセンターに出かけたところ、幸運なことに当時センターにおられた喜多村和之先生の「学校淘汰の研究」に参加させていただくことになった。この研究会では、アメリカを中心に幅広い視野で研究を進めていく重要性を学ぶことができた。

いまでは、どこにいてもインターネットで世界中と簡単につながることができる。しかし、1980年頃には、センターは、東京への窓であるだけでなく、アメリカを中心に世界への窓の役割を果たしていた。もちろん、インターネットなどない。膨大な文献資料と国際交流事業によってである。ERICの検索で university closing と入れたときに3,000以上の文献が出てきたのには驚いた。また、フォーマルな会議だけでなく、多くの外国からの来訪

No. **50**

者によって、視野を広げることができた。

そして、より重要なのは、口コミによって、センターに行けば、広島ローカルではない東京やアメリカなどの情報がアンテナを張らなくても自然に流れ込んできたことである。また、喜多村先生はじめ、有本章先生や馬越徹先生あるいは若手の助手諸君などが、当時、私立大学教員として視野が狭くなりそうだった私に絶えず刺激を与えてくれたことが、何にもかえがたい経験になった。結局、私は地方のデメリットを全く感じずにすんだのであるが、それが多くの人ののおかげ、インヴィジブル・カレッジのおかげであることに気がついたのはさらにずっと後のことである。

たぶん、こうしたインヴィジブル・カレッジの重要性は、誰も教えてくれない。しかし、研究者に限らず、誰もが一人ひとり、自分のインヴィジブル・カレッジを持っているはずである。研究者にとって、インヴィジブル・カレッジがどれくらい重要か、それを自覚するか、活用できるかどうかで長い間には大きな差ができるだろう。これがインヴィジブル・カレッジの価値を長らく自覚できなかった者からの若手へのせめてものアドバイスである。インターネットの時代だからこそ、膨大な情報の波に飲み込まれるのではなく、限られた有益な情報が得られることや、ものの見方を確立することができるが、こうしたインヴィジブル・カレッジの価値なのである。

もう一つのトピックは、大学の意思決定のあり方、視野に関連するセンターの役割の問題である。国立大学は法人化により、個々の大学の意思決定力、とくに学長を中心とする執行部の意思決定力は格段に強まった。また、国立大学だけでなく、公立大学や私立大学でもガバナンス改革により学長のリーダーシップが求められるようになった。しかし、このため、自分の大学のことだけしか念頭にない、という傾向が広がっているように思われる。自分の大学の方向性を決定するためには、もう一つ上のレベル、つまり日本の高等教育全体の状況、さらには世界の高等教育の動向を見ることが重要である。しかし、ともすれば自分の大学のことしか見ない。もっと言えば、一つ下の次元、つまり自分の出身母体の部局のことをまず念頭に置くという傾向はないだろうか。

高等教育のセンターにこうした大学執行部の意向が強く働くようになったのも法人化の影響と言えるだろう。大学教育センターが多くの大学に設置されているが、日本全体あるいは世界の高等教育を視野に入れて活動しているセンターは数えるほどしかない。かつてセンターでは、for Hiroshima か at Hiroshima かが大きな議論になった。現在では、ほとんどの高等教育のセンターは for でなければ生き残れない状況になっているように見える。こうした日本全体の高等教育を視野に入れた高等教育のセンターが自分の大学のことしか考えなくなったら、日本の高等教育の方向性を示すことができなくなってしまふ。その結果、大学はますます自己の狭い視野で意思決定することになる。他方で、OECDなどの国際会議に出ると、日本の高等教育のプレゼンスが下がっていることを感じざるを得ない。

インヴィジブル・カレッジと法人化後の高等教育のセンター、一見無関係なようだが、Center of Study という点では共通の問題である。高等教育のネットワークのコアと呼んでもいい。センターはその役割を創設以来果たしてきた。全国に数多くの高等教育のセンターができたことで、むしろコアとしての役割は重くなっているのではないだろうか。

古くから国際交流の問題に取り組んできたセンターは、今、国際共同研究推進事業をはじめ、国際共同拠点をめざしている。for Hiroshima か at Hiroshima か、考えてみれば、両者は二者択一ではないはずである。国内の高等教育の動向と研究だけでなく、海外の動向と研究を集約して、発信することが国際共同拠点の役割のひとつだが、これから広島大学だけでなく、さらに広く地域にも貢献できるものが生まれることが期待される。センターには全国の他の多くのセンターの先頭にたっていただきたい。センターのインヴィジブル・カレッジで育った者の期待であり願望である。

センター長就任のご挨拶



大膳 司

(高等教育研究開発センター長／教授)

この度、14代13人目のセンター長に任命されました。当センターの諸先輩方やコリーグの皆さんのご努力によって構築された当センターの遺産を、次世代に上手に Batonタッチできるような努力して参りたいと思っております。

知識基盤社会の進展に伴って高等教育に対する社会的期待はますます高まっております。

しかしながら、高等教育機関を取り巻く状況は18歳人口の減少、グローバル経済の進展、学生1人当りの公財政教育支出費の低下など、厳しさを増しています。

当センターは、1972年に設置されて以来、約半世紀間、日本の高等教育のあり方について、歴史学、経済学、人類学、比較教育社会学、教育工学など多様な視点から調査研究を蓄積し、研究員集会や国際シンポジウムをつうじて、日本ばかりではなく、海外への発信に努めて参りました。今後とも、日本の高等教育システムの改革および個々の高等教育機関の発展に役立つよう、研究成果や情報の発信に努めていきたいと思っております。

また教育面では、大学院教育を通じて、最先端の高等教育の知識技能の普及に努めてきました。これまで同様、時代の要請にこたえられる高等教育の研究者、管理者、専門家の養成にも携わっていききたいと思っております。

これらの活動は、センター設立以来、関係者皆様のご理解とご協力によって支えられてきました。今後、当センターを取り巻く状況は決して楽観的なものではありませんが、これらの過去の成果に自己満足することなく、スタッフ一同努力するつもりであります。

今後ともこれまでと変わらないご支援・ご鞭撻をお願いいたします。

共同利用・共同研究拠点および戦略的研究プロジェクトについて

丸山 文裕

(高等教育研究開発センター前センター長／教授)

2016年4月発行の『コリーグ』第49号でもお伝えしたように、文部科学省は「全国共同利用・共同研究拠点」事業を進め、研究拠点整備を行っています。当センターも事業に申請し、高等教育研究拠点として名乗りをあげましたが、認定には至りませんでした。しかし幸いにも2016年からスタートアップ予算が、措置されることになりました。

この予算を用いて、「大学の教育研究の生産性向上」をメインテーマに当センターでの研究を進めることになりました。大学進学がユニバーサル化すると、能力や動機づけの点で学生が多様化し、教育の質保証が重要となります。またノーベル賞受賞に対する熱狂に見るまでもなく、大学での基礎的応用的研究が社会から期待されています。しかしながら政府財政のひっ迫によって、大学への公財政支出の増加は期待できません。そこで各国で大学の教育研究の生産性の向上が、重要な政策課題となります。当センターの研究はこの課題にこたえようとするものです。なお当センターが2008年から開始した戦略的研究推進経費による研究プロジェクトも2016、17年は、同じテーマで進めます。

当センターが研究拠点となるべく、海外と日本の研究者ネットワークの形成強化、物的人的研究リソー

スの充実に力を注ぎます。中でも2016年度から新たに始めたのが、高等教育の公募型研究の推進です。これは当センターが高等教育研究者に対して、研究を公募し、研究者に独創的、新規性、将来性のある研究を提案していただきます。そしてセンター外部の研究者も加わる共同研究委員会が、これらの提案された研究を審査し、選定された研究に物的・人的・経済的支援を行うものです。このプロセスを経て、高等教育の伝統的な研究に加え、新しい領域の研究の開拓に貢献できるのではないかと考えています。

新領域の研究開拓は、文部科学省、日本学術振興会などの研究助成財団も重要な役割を果たします。しかし審査は限られたピアレビューでしかありません。公平性、透明性の観点から審査されるため、特色があっても不備のある研究には助成されません。また学会も将来の研究の方向付けに影響を与えますが、助成はなく、また1年に何度もその分野の専門家が議論するわけではありません。当センターの公募型研究は、助成財団や学会とも異なった方法と研究組織で行うことで、これらの方向とは異なった道を新たな作り、新領域を発掘できるのではないかと期待しています。

14th International Workshop on Higher Education Reform (HER2017) の開催告知

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

このワークショップは、高等教育の改革とその他の主要な変化についての研究を深めることを目的とする国際研究会である。2003年のバンクーバー（カナダ）を皮切りに、これまで毎年、世界各国の高等教育研究機関の持ち回りによって開催されてきた。14回目となる本年は、その開催を広島大学高等教育研究開発センターが受けることとなった。主題を「Enhancing Performance and Productivity in Higher Education」と定め、基調講演者として申正澈 [신정철] (ソウル大学:韓国), Glen A. Jones (トロント大学:カナダ), 吉田文 (早稲田大学:日本) の各氏を予定している。5月31日まで報告申込を受け付けているので (4月30日締切を延長), 希望者は以下のウェブサイトから申し込まれたい (審査の上報告者を決定)。

開催日: 2017年9月26日~28日

会場: 広島大学学士会館 (東広島キャンパス)

HER2017ウェブサイト: <http://iwher2017.hiroshima-u.ac.jp/>

HER2017実行委員会連絡先: iwher2017@hiroshima-u.ac.jp

International Scientific Committee : German Alvarez Mendiola (Centre for Advanced Research and Studies, Mexico) ; Walter Archer (University of Alberta, Canada) ; Mei Li (East China Normal University (ECNU), China) ; Sumin Li (Tianjin Normal University, China) ; Hans Schuetze (University of British Columbia, Canada) ; Maria Slowey (Dublin City University, Ireland) ; Andra Wolter (Humboldt University, Germany) ; Shinichi Yamamoto (Oberlin University, Japan) ; Pavel Zgaga (University of Ljubljana, Slovenia)

第六回日豪交流セミナー報告

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

2017年4月10日から11日にかけて、広島大学高等教育研究開発センター（RIHE）とオーストラリア・メルボルン大学高等教育研究センター（CSHE）との共催で、第六回日豪交流セミナー『日豪における高等教育のダイナミクス』が広島大学高等教育研究開発センターにおいて開催されました。

オーストラリア側からは、Richard James 教授（メルボルン大学副学長・高等教育研究センター教授）をはじめ、Emmaline Bexley シニア講師、Chi Baik シニア講師と米澤由香子助教（現在東北大学所属）の4名が参加し、下記について研究発表を行いました。

「ガバナンス、質保証と国家基準 - 近代大学のガバナンスへのアプローチ」 Richard James 教授
「オーストラリアの国際化が直面している課題」 Chi Baik シニア講師
「学術的ワークと管理運営にかかわるワークの区別の曖昧」 Emmaline Bexley シニア講師
「日本の大学における国際化のマネジメント - 機関レベルの構造と文化の影響」 米澤由香子助教

日本側は、下記の研究発表を行いました。

「日本における最近の大学改革 - なぜ始まり、止まらないのか？」 山本眞一教授
「日本の大学ガバナンスの改革 - どれほどの効果があったのか？」 大場淳准教授, 村澤昌崇准教授,
渡邊聡教授
「日本におけるグローバル人材のイメージ, 期待される能力と育成方法」 大膳司教授
「Third Space Professionals の支援を目的とした伴走者型支援について」 佐藤万知准教授
「新自由主義政策を背景とした新世代の大学教員 - 韓国のケースを中心に -」 金良善講師
「国際的協力のマネジメント」 野村朋絵研究員
「日本における英語による学位プログラムを通じた国際化」 小竹雅子氏

これらの報告・議論を通じて、日豪双方の参加者が、両国の政策的、機関的レベルにおける大学の改革の背景や、大学ガバナンス改革や大学教授職、高等教育国際化の特徴、それらの変化、直面している課題、今後の動き、そして大学教育への影響などを深く理解することができました。また、広島大学高等教育研究開発センターから4名の博士課程前期学生が各自の研究概要も発表しました。それらの研究発表とディスカッション以外に、日豪双方の参加者は、今後、国際セミナーの共催の継続をはじめ、お互いに関心がある課題について共同研究を立ち上げ、また共同研究成果発表をすることで合意しました。



第44回研究員集会報告

村澤 昌崇

(高等教育研究開発センター准教授)

今年度の研究員集会は、「大学運営におけるリーダーシップ」と題して2016年10月27日(木)の半日で行われた。前半は第1部として慶應義塾大学の菊澤研宗先生による基調講演、後半は第2部として高大高教研の大場・村澤、共愛学園前橋国際大学学長の大森昭生先生、佐賀大学の村山詩帆先生による論点提起がなされた。これら講演・論点提起をうけ、コメンテーターには同志社大学の太田肇先生を迎え、最後に総括討論が行われた。

基調講演の菊澤先生からは、組織の経済学における「組織の不条理」「取引コスト」論等の理論を紐解きながら、人々が個々人にとって合理的に行動(機会主義的行動)すればするほど、組織にとって不条理な結果が導かれることが示された。続く論点提起では、第1に、高教研の大場・村澤により、大学におけるリーダーシップの在り方に関する現況の整理と理論・先行研究の紹介、そしてデータ分析の結果が披露された。第2報告では、共愛学園前橋国際大学の大森昭生学長により、同大学における教職一体ガバナンスが紹介され、構成員全員がリーダーとしての自覚を持つことの重要性が説かれた。第3報告では、佐賀大学の村山詩帆先生により、先行研究のリーダーシップ論が精緻に整理・紹介され、その上で、「大学の外部の利害や制度がガバナンス改革を通じて大学に内部化される」(改革の)オルタナティブはあるのか」という問題提起がなされた。

これら講演・論点提起を踏まえ、同志社大学の太田肇先生からは、それぞれに対してのコメントが寄せられた上で、ご専門の組織論の立場から大学の特徴が指摘された。すなわち、大学はプロフェッショナルの集団であり、「遠心組織」(注：組織の外に飛びだそうとする、主体的、自律的、現場主義)と仮定できる。このような特性を持つ大学では、構成員の隠れたホンネを汲み取り、改革へと繋げるリーダーが支持され成功する、あるいはフォロワーの成熟度に応じて放置(リーダーシップを発揮しなくても良い：リーダーシップの代替理論)してもよいのではないか、という提案がなされた。

これら講演や報告そしてコメントを受けて、会場の参加者を交えた熱い議論がなされた。企画の狙い通り、様々な理論や経験に基づいたリーダー論が多角的に供出されたことは、今後の高等教育の組織・経営研究に一石を投じたことになったのではないだろうか。



高等教育公開セミナー報告

平成28年度高等教育公開セミナー

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

センターは、平成14年度から高等教育に関する諸問題を取り上げる高等教育公開セミナーを毎年開催している。本セミナーは、近年多く開催されている実践に焦点を当てたセミナー類とは異なって、センター教員等の研究に基づいて高等教育に関する基礎的な知識等を提供することを目的としている。対象は、大学の教職員や学生、その他高等教育に関心のある全ての者である。平成28年度は8月18～19日の両日にセミナーを開催したところ、学内外から33名の申し込みがあった。広島大学教職員のほか、関東や近畿など各地から大学教職員、高等学校教員、民間企業関係者らが参加した。

今回のセミナーでは、「大学のガバナンス・リーダーシップ・組織文化」を主題として取り上げた。昨今取り組まれている大学ガバナンス改革や大学の組織文化、あるいは求められるリーダーシップに関連して、政策や大学での取り組み、諸外国の状況等について、センター教員・研究員が歴史・統計分析・国際比較といった様々な角度から講義を行った。セミナーのプログラムは以下の通りである。

【第1日】

- 講義1 日本の大学改革の動向～国立大学のガバナンスを中心に（丸山文裕）
- 講義2 大学組織のグローバル化を支える組織文化・経営方式（大膳司）
- 講義3 大学ガバナンス：その理念と現実（藤村正司）
- 講義4 大学ガバナンスと環境・戦略・組織特性（村澤昌崇）
- 講義5 大学間連携を考える－「センスメーカー」の観点から－（野村朋絵）
- 講義6 大学のガバナンス改革の諸論点（大場淳）

【第2日】

- 講義7 教育活動に関する議論と合意形成（佐藤万知）
- 講義8 日本の大学ガバナンスはどう変化したのか？－1992年と2011年のアンケート調査のデータ分析を中心に－（黄福涛）
- 講義9 「SERU 学生調査」－教育の国際的な質保証に向けた広島大学の取り組みとガバナンス（渡邊聡）



学生シンポジウム報告

シンポジウム「大学と学生」(第3回) 大学における経験学習：学生の経験をどのように学習に活かすか

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

シンポジウム「大学と学生」は、21世紀の高等教育における学生の在り方や大学と学生の関係等について、学生を交えて検討することを目的として、平成26年に始められたものである。3回目の本年度は、「大学における経験学習：学生の経験をどのように学習に活かすか」を主題として平成28年9月23日に広島大学学士会館で開催され、報告者等を含めて52名の参加があった。

本年度は、初の試みとして報告者の公募を行った。全部で10件の応募があり(うち1件は辞退)、学外者を交えて審査した結果4名(グループ)に報告を依頼することとなった。当初予定されていなかったが、残る5件についてもポスターセッションへの参加を打診したところ、3名の参加を得ることができた。

シンポジウムのプログラム及びポスターセッションの概要は以下の通りである。

日時：平成28年9月23日(金) 13時～17時30分(情報交換会終了20時)

会場：広島大学学士会館レセプションホール

(プログラム)

13:00-13:10 開会行事

13:10-13:30 趣旨説明

13:30-14:45 講演：木村 充(東京大学大学総合教育研究センター)「経験からの学び：経験をどのように学びに活かすか」

14:45-14:55 休憩

14:55-15:55 学生による事例報告

報告1 永友雄也(長崎大学)「経験学習の可視化について」

報告2 田代智也(千葉大学)「グローバルボランティアと経験学習」

報告3 黒田昌・山田智子(金沢大学)「まちづくりインターンシップにみる経験学習」

報告4 小林理緒・中見茉里帆・合田優香・南早紀(関西大学)「学生だからこそ行える大学での防災活動」

15:45-15:55 休憩

15:55-16:20 コメント：村上むつ子(国際基督教大学アジア文化研究所／サービス・ラーニング・ネットワーク)

16:20-17:20 討論

17:20 閉会

18:00-20:00 情報交換会

(ポスターセッション)

熊沢有里(椋山女学園大学)「学びの経験の持続可能性を求めて」

松永圭世(九州大学)「学問と社会を繋ぐ経験 ―学問と経験を往復して得たもの」

森野智子(広島大学)「インターンシップに学部1年次から参加する意義」



2016年度の公開研究会

*肩書は当時のもの（敬称略）

	講 師	テ ー マ
第1回 (2016/4/15)	Ioan Roxin 氏 (フランス・フランシュ＝コンテ大学メンバー リアル校・教授)	セマンティック・ウェブ時代の大学
第2回 (2016/6/1)	湯 暁蒙氏 (中国・広州大学高等教育研究所・准教授)	日本の南進政策における台北帝国大 大学の役割
第3回 (2016/6/27)	有本 章氏 (兵庫大学高等教育研究センター・教授) Jung Cheol SHIN 氏 (韓国・ソウル大学) Chang Da WAN 氏 (マレーシア・Universiti Sains Malaysia) Shuangye CHEN 氏 (中国・Chinese University of Hong Kong) 米澤 彰純氏 (東北大学インスティテューショ ナル・リサーチ室・室長／教授) 杉本 和弘氏 (東北大学高度教養教育学生支援機構・教授) 李 敏氏 (信州大学高等教育研究センター・講師) 大膳 司氏 (広島大学高等教育研究開発センター・教授) 黄 福涛氏 (広島大学高等教育研究開発センター・教授)	外国人大学教員の採用に関する国際 比較研究
第4回 (2017/1/21)	湯 暁蒙氏 (中国・広州大学高等教育研究所・准教授)	日本植民地時代における台湾の高等 教育 －専門学校及び師範学校の誕生とそ の発展－
第5回 (2017/2/20)	速水 幹也氏 (椋山女学園大学・事務職員)	事務職員 大学職員の専門職化に関 する比較分析 －他専門職との比較から－
第6回 (2017/2/24) グローバル化 推進室主催/ RIHE 共催	Dary Erwin 氏 (アメリカ・ジェームズ・マディソン大学) Keston Fulcher 氏 (アメリカ・ジェームズ・マディソン大学)	第10回 スーパーグローバル大学創 成支援セミナー アセスメントによる教育改善と質保 証－James Madison University の 取組から学ぶ－
第7回 (2017/2/27)	Axel Didriksson Takayanagui 氏 (メキシコ・メキシコ自治大学 大学・教育研究 所常勤研究員)	ラテン＝アメリカの社会と大学の変 革：動向と課題
第8回 (2017/3/6)	Charles R. Barton 氏 (アメリカ・サウスカロライナ州立大学ビュー フォート校・教授)	トランプ政権における高等教育政 策：その行方は？
第9回 (2017/3/14)	呂 光洙氏 (中国・東北大学文法学院教育経済・管理研究 所副所長・講師)	中国における新しい大学組織への進 化

センター往来【2016年4月～2017年3月】

*所属は当時のもの（敬称略）

<2016年>

- 4月 Ioan Roxin（フランシュ=コンテ大学）隋 永強, 宋 官東, 呂 光洙（中国東北大学）
- 5月 松尾 浩道, 松本 昌三, 横田 美咲（文部科学省）
- 6月 阿部 経一（(株)リクルートマーケティングパートナーズ）熊谷 昌彦, 加藤 博和（米子工業高等専門学校）有本 章（兵庫大学）Jung Cheol SHIN（ソウル大学）Chang Da WAN（マレーシア理科大学）Shuangye CHEN（香港中文大学）米澤 彰純, 杉本 和弘（東北大学）李 敏（信州大学）
- 7月 磯田 文雄（名古屋大学 / アジアサテライトキャンパス学院）Ludivine Allagnat（エルゼビア）
- 8月 村井 純（慶應義塾大学）米澤 由香子（東北大学）
- 9月 千賀 威昌, 清水 淳（日本福祉大学）木村 充（東京大学）村上 むつ子（国際基督教大学）廣内 大輔（岐阜大学）永友 雄也（長崎大学）田代 智也（千葉大学）黒田 昌・山田 智子（金沢大学）小林 理緒, 中見 茉里帆, 合田 優香, 南 早紀（関西大学）熊沢 有里（椋山女学園大学）松永 圭世（九州大学）森野 智子（広島大学）Zu Ming, Liu Qingyun（安徽工业大学）
- 10月 Dame Julia Goodfellow（イギリス大学協会）**第44回研究員集会招聘者** [羽田 貴史（東北大学）立石 慎治（国立教育政策研究所）阿曾沼 明裕（名古屋大学）菊澤 研宗（慶應義塾大学）大森 昭生（共愛学園前橋国際大学）村山 詩帆（佐賀大学）太田 肇（同志社大学）] 山下 仁司, 安部 有紀子, 井ノ上 憲司（大阪大学）
- 11月 Lynnette Zipp, 大津 雅人, Nicole Watanabe（マイクロンTD・Global Senior HR Business Partner for R&D）戸田 千速（東京大学）滝 紀子（河合塾）阿部 経一（(株)リクルートマーケティングパートナーズ）福山 彰彦（富士ゼロックス(株)）幸野 隆志, 林 佐平（中国教育国際交流協会）
- 12月 立石 慎治（国立教育政策研究所）

<2017年>

- 1月 角田 良明（広島市立大学）
- 2月 速水 幹也（椋山女学園大学）Dary Erwin, Keston Fulcher（ジェームズ・マディソン大学）Axel Didriksson Takayanagui（メキシコ自治大学）
- 3月 Charles R. Barton（サウスカロライナ州立大学）呂 光洙（中国東北大学）立石 慎治（国立教育政策研究所）

新任者・離任者・就職者から一言

2017年度客員研究員



太田 肇 (おおた はじめ)

同志社大学政策学部/大学大学院総合政策科学研究科 教授

私は主に企業等の組織やマネジメントについて研究しており、学位論文は「プロフェッショナルと組織」でした。異なる要

請の間で葛藤を抱えるプロフェッショナルにはどのような組織やマネジメントが有効かを論じたものです。そこでは企業における研究者や技術者を主な対象にしていますが、提示したモデルは大学と教職員の関係にも応用できるのではないかと考えています。教職員の意欲と能力を最大限に引き出し、それを組織力につなげていくにはどのようなフレームワークとマネジメントが必要かを研究していきたいと思っています。教育学の世界の外にいる私のような者に対して、研究の機会を与えていただいたことに感謝しています。



加藤 博和 (かとう ひろかず)

米子工業高等専門学校教養教育科 准教授

客員研究員を拝命し大変恐縮に存じます。私は1997~99年度、社会科学研究所国際社会論専攻時代の博士課程前期に在籍し、

「新制大学の再編成と「教養部」の制度化過程」という論文で一応、修士(学術)を頂きました。

その後、実家近くの広島県立大学の大学院に移り、乗合バス事業経営に関する研究に転向し、3年余りの団体職員生活(産学官連携に従事)を経て、2006年度から高専の一般科目(社会)の教員として職を得、現在に至っています。

2年くらい前でしょうか、校長から「技術者教育にリベラルアーツ(教養)が重要だ」、「高専教育の功罪を教育社会学で明らかにしたい」と小職に白羽の矢が刺さりました。そして2016年4月に「リベラルアーツセンター」が新設され、副センター長を仰せつかりました。

出戻りの気恥ずかしさもありますが、一般教育・一般科目研究、高専研究で高等教育研究のウイングを広げることができればと思っています。



加藤 善子 (かとう よしこ)

信州大学高等教育研究センター 准教授

このたびは、客員研究員としてお招きいただき、まことにありがとうございます。最先端を走っておられる先生方にご指導

いただける機会を賜ったことに、深く感謝いたします。

信州大学での主な業務は、全学FDと初年次教育です。複数の学部の教員と信頼関係を結びながら授業改善や論文作成などの協力体制をつくり、初年次セミナーとそれにリンクした学習支援を整備してきました。これらの領域で、少しでもお役に立たせていただければと思っています。同時に、戦前の教育機会や学校を介した社会移動の研究を細々と続けています。部分的にかじってきたいくつかの領域を、戦前戦後を通して俯瞰できるような視点を得られるのではないかと楽しみにしています。どうぞよろしく願い申し上げます。



川田 恵介 (かわた けいすけ)

東京大学大学院 社会科学研究所 准教授

本年4月づけで研究員となります、川田恵介と申します。私はこれまで応用経済学の視点から、教育、労働について理論的・実証的な研究を行ってきました。

高等教育研究開発センターでは計量分析、とくに統計的因果推論の手法を用いて、短期留学などの教育プログラムやクラスサイズの影響評価を進めていきます。直近の研究プロジェクトとしては、広島大学のSTARTプログラムが語学力の到達達成度に与えた影響について、統計的・数量的な評価を行っております。このような研究活動を通じて、より効果的な教育プログラムを提案できるよう精進してまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。



菊澤 研宗 (きくざわ けんしゅう)

慶應義塾大学商学部/大学院商学研究科 教授

私は、これまで経営学、とくに組織の経済学という分野を専門として、そこで展開された理論を用いて、コーポレート・ガ

バナンス問題、戦略経営問題、組織デザイン問題、

企業不祥事問題などの研究を進めてきました。とくに、私のテーマは、人間は無知で非合理で失敗するのではなく、人間は合理的に失敗するという不条理現象を理論的に説明し、解決することです。昨年、広島大学で行われた研究員集會に招待していただき、高等教育をめぐる問題の重要性を認識しました。これまで得た知見を高等教育問題にも応用し、可能な限り貢献していきたいと思っています。



森 智子 (もり ともこ)

関西大学教育推進部 教授

この度は、RIHEの客員研究員としてお声がけいただきありがとうございます。研究上でまた新たな刺激をいただける機会を大変喜んでおります。

関西大学では昨年10月に新執行部体制になり、教育・学修の質保証やブランディングに向けて、新たに舵を切りました。その中で学修成果の可視化を担う教学IRを核に、内部質保証システム全体の構築に携わっています。そもそも学習心理学や学習理論といった「学ぶ」に関する研究に携わっていることから、今現在の高等教育における「教える」から「学ぶ」へのパラダイム転換は、まさに自らの研究成果を実践に活かす機会と捉えています。微力ではございますが、貴センターのお力になれば幸いです。どうぞよろしく願い申し上げます。



山倉 健嗣(やまくら けんし)

大妻女子大学社会情報学部 教授

このたびは貴センターの客員研究員としての機会を与您いただき本当にありがとうございます。私の専門は経営学で、組織論、経営戦略論です。これまで企業における組織間関係の形成・展開・変革を主として研究を進めてきました。欧米では高等教育について組織論や戦略論からの研究の蓄積があります。これらの研究を批判的に摂取し、日本での研究の蓄積を踏まえ、組織論や戦略論の研究結果を適用できる私の新しい研究テーマとして、大学のガバナンスや組織、組織間関係をきちんと考えるいい機会が与えられたと考えています。微力ながらセンターへ貢献できるよう努力するつもりです。どうぞよろしく願い申し上げます。



呂 光洙 (ろ こうしゅ)

中国東北大学教育経済・管理研究所副所長/講師

2002年に日本へ留学し、9年間広島大学に滞在しました。ご縁があり、昨春は初めて貴センターを訪れ、今年3月14日は「中国における新しい大学組織への進化」をテーマに公開研究会を行いました。このたびは、貴センターの外国人客員研究員にお加えいただき、大変有り難く存じております。

私の所属する教育経済・管理研究所は、主に高等教育に関する学際的研究をすすめております。私は教育現象をネットワーク的視点から解明する研究を行ってきました。最近、大学組織改革や教員評価にも関心をもっております。これからは、貴センターから多くのことを学びつつ、微力ながらながしての貢献ができればと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。

2017年度学内研究員



馬場 卓也 (ばば たくや)

大学院国際協力研究科 研究科長/教授

このたびは、伝統あるセンターの客員研究員を拜命し、大変光栄です。私は初等・中等学校の算数数学教育について研究しています。特に所属する研究科のミッションにより、アジア・アフリカ諸国の教育開発、さらに教育分野の高等教育に関わっています。2015年、国際社会では「持続可能な開発目標 (SDGs)」が採択され、先進国と途上国がこれらの課題に共同して取り組むことが決められました。その実現には、今まで以上に、文化的差異を乗り越えたコミュニケーションのあり方、新しい技術の利用などが求められています。協働する社会の実現に向け、高等教育が果たせる役割、そして国際協力の役割について考えてみたいと思います。

2017年度新任職員



Yangson Kim

高等教育研究開発センター講師

2017年4月着任

My name is Yangson Kim from Korea and I am happy to be in RIHE from April 1 2017.

I would like to take a moment to introduce

myself to you by this short message in Colleague. I have been hired as a Lecturer and will be working alongside members and students in RIHE. Before I joined RIHE, I worked as a senior researcher in Korean Council for University Education and as a research fellow in Education Research Institute at Seoul National University and in Center for Innovation, Technology and Policy Research at Instituto Superior Tecnico - Universidade de Lisboa. The areas of my special interests focus on internationalization of higher education, research productivity and collaboration of academics, academic profession, institutional context of higher education, and comparative higher education in Asia-Pacific countries. I would like to welcome all of you for discussing and sharing the ideas and topic about higher education. Also, I genuinely look forward to having the opportunity to meet you in person and I am excited about the research we will be working on together in the future. Please do not hesitate to stop by my office and contact me, if you have any questions or just meet in person. I appreciate your warm welcoming and supports.

2016年度離任者



関内 菜穂子(せきうち なおこ)
契約一般職員(資料・情報担当)
(2017年3月退職)

この3月を持ちまして20年あまりお世話になりました、センターを離職することになりました。

今、つらつら思い出すのは、センターでの充実した日々ばかりです。

できないと思われることが苦勞してできるようになる喜びを私はセンターの情報調査室の業務から知ることができました。

当初、「高等教育」についても「資料」についても何もわからず、できない私を根気よく導いてくれた沖さんには感謝しかありません。代々の先生、そして事務職員、大学院生の皆さん。ほんとに皆さんのお力添えそしてご協力あってのどうにかこうにかの20年でした。

結局、私はセンターの人そして雰囲気がとても好きでした。

最後に更なるセンターのご発展を祈念して結びの言葉とさせていただきます。

修了生



佐々木 宏(ささき ひろし)
博士課程前期修了(2017年3月)

私は現在53歳で入学した当時は50を超えていました。周囲からは奨励の声よりも怪訝な目で見られることの方が多かったのは事実です。しかしながら現在

大学発ベンチャーで立ち上げる教育プラットフォームの主宰者として学位は必須の要件だと考え迷うことなくRIHEの門をたたきました。大学院での予習と復習は社会人にとって想像以上にハードで、1年目は深夜の1時前に就寝することはほとんどありませんでした。博士後期課程はさらに長い道のりとなりますが、引き続きRIHEの皆様にお世話になり、高等教育界の発展に寄与する斬新な研究に挑戦したいと思っておりますので、引き続きご支援を頂ければ幸いです。



鶴 健太郎(つる けんたろう)
博士課程前期修了(2017年3月)

2015年4月にRIHEの博士課程前期に入学し、あっという間に2年間が過ぎました。2年間を振り返ってみると、RIHEには

多くの思い出があり、様々な経験をさせていただきました。また、一方で、先生方や職員の方々をはじめ、様々な方々のお世話になりました。この場をかりまして改めて御礼申し上げます。

RIHEはとても充実した施設であり、高等教育について研究するには一番良い場所であったと思います。高等教育について素人だった私も少しは高等教育の重要性などがわかるようになりました。また、高等教育についてのみではなく、研究に対する姿勢についてなども学ぶことができ、充実した2年間でした。ここで学んだことを今後の人生に活かしていけることができるよう、精進してまいります。

私は、今後も高等教育に携わっていきます。また、今後ともどうぞよろしくお願い致します。



辺 雅茹(へん がじょ)
博士課程前期修了(2017年3月)

2014年10月に研究生としてセンターに入学してから濃密な2年半を経て、指導教員の藤村先生をはじめ、センターの先生方

と皆さんのおかげで博士課程前期を修了すること

ができました。この2年半、授業や課題による知識だけではなく、多方面で知恵や気付きを得ることができました。心からお礼を申し上げます。これから社会人になって辛く苦しいことがあったとしても、この2年半の間で得た経験を思い出し、少しずつでも前進していきたいです。

最後に、改めてこの2年半を振り返ってみると多くの人に支えられていたのだと実感しました。本当にありがとうございました。ここで学んだ事をこれからの人生に結びつけて意味のあるものにしていきたいと思っています。

新 入 生



川村 和弘(かわむら かずひろ)
博士課程前期入学 (2017年4月)

2013年に初めてRIHEを訪れてから、何かとご縁が続き、ついに入学することとなりました。これから2年間、よろしく

お願いします。

研究テーマは、公立大学法人(大学)への設立団体(地方自治体)職員の派遣についてです。私は2011年から山口県立大学に在職していますが、2006年から2009年まで北九州市立大学への派遣職員でした。多くの公立大学において、高等教育における経験などほぼない畑違いの地方自治体職員が、それなりのポジションに人事異動としてやってきては数年して去っていくのです。その構造がもたらす組織的な停滞を常に意識して仕事をしてきました。

ご指導をいただく中で、実務的な思考を解きほぐし、研究という新たな体系を学び、深めて行きたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



鈴木 誠志(すずき さとし)
博士課程前期入学 (2017年4月)

今年度より、博士課程前期に社会人大学院生として入学しました鈴木と申します。長期履修制度を利用して、同期の皆さん

より1年ほどゆっくと修了を目指したいと思っています。私は私立の専門学校、大学に事務職員として勤務して15年程経ちますが、40歳を過ぎてふと振り返ったとき、自分が身を置く高等教育業界について断片的知識の寄せ集めしか身につけておらず、体系的に全体像をつかめきれていないことに気がきました。そこで、高等教育に関しての体系

的知識をがっつり学ぼうとこちらの大学院を受験いたしました。この3年間は、センターの先生方をはじめ研究室の皆さん等、様々な方々のご指導のもと多くの知識を吸収していきたいと思っていますので、何卒よろしくお願いいたします。



砂田 寛雅(すなだ ひろまさ)
博士課程前期入学 (2017年4月)

「砂田さん、大学院で勉強したほうが良いですよ。」平成13年に大学職員となつてから、何度か先生方に言われた言葉である。これまでは、その場その場で直面する業務やそこから派生する課題を解決することが大学職員の役割と考えていたし、一定の成果をあげてきたという自負もあり、都度軽く受け流していた。一方、平成26年から携わった学部設置業務では、学部教育を教員とともに一から積み上げる経験をするとともに、カリキュラム設計に関する専門性の不足を痛感した。学問の府にいながらにして、四十路も半ばに差しかかっての遅い気づきに自嘲しつつ、大学院での学びを今後のキャリアにつなげていきたい。



堀内 喜代美(ほりうち きよみ)
博士課程前期入学 (2017年4月)

企業勤務及び大学職員としての勤務を通して感じてきた日本の大学に対する問題意識を、研究という形でさらに深掘りしていきたいとの思いで入学させていただきました。具体的には、近年日本の大学でも増加傾向にある「英語による学位プログラム」が学内の組織連携にもたらす影響について研究していく予定です。

RIHEには高等教育の各分野に精通した著名な先生方が在籍し、また関連の図書・資料も揃っており、高等教育を研究する場としては国内で最も贅沢な教育研究環境であると実感しています。この贅沢なリソースを生かすも殺すも自分次第。自分の関心のある分野だけでなく幅広い分野に目を向け、高等教育を俯瞰的に捉えられる視点を養っていきたいと思っています。



山岡 直樹(やまおか なおき)
博士課程前期入学 (2017年4月)

2017年4月からお世話になる山岡と申します。広島大学国際協力研究科支援室で職員としております。職員としてこれまで

学生系，会計系，国際系を経験してきました。RIHEで国際化論，評価論，組織論・職員論，経済論，アドミッション・カリキュラム論等のキーワードについて理論的・体系的に学ぶことにより，様々な視点から大学を捉え，培った知識・分析力を活かし，大学のさらなるグローバル化へ向けた支援体制の在り方について考察したいと考えています。

趣味はスポーツ全般で最近では時間のある時にテニス，ランニングをしています。

今後ともよろしく願いいたします。



陳麗蘭 (ちん れいらん)
博士課程前期入学 (2017年4月)
※ 研究生より進学

2017年4月より博士課程前期に入学した陳麗蘭と申します。

2016年10月に，研究生としてRIHEへ入学させていただいて，半年が経ちました。当初は，期待しながらも不安でしたが，この半年間，黄先生をはじめ諸先生方の丁寧なご指導，先輩たちの熱心なご支持，また職員の皆様のご支援により，これからの二年間もきっと良い学生生活になると信じています。センターに入学して，半年経ちましたが，先生方の研究教育能力やセンターの情報量の素晴らしさ，そして，研究会や国際会議などの機会も多く，様々な視点に触れ，自分の不足点を反省することができました。

私にとって，この時期は新しいスタートと思っています。いままでの勉強は受動的な知識や技能を先生から学ぶという形で行っていたのに対して，これからはアクティブラーニングを実践して，関心を持つ分野を中心として，様々な研究を行っていきたいと思います。世界的に急速な発展にともない，大学の国際化もますます注目を浴びつつあります。私の研究キーワードは大学教員の国際化です。外国人教員全体の動向を分析すると同時に，外国人教員における多数派である中国人教員の視点から大学教員の国際化を検証していきたいと思っています。色んな不足点があると思いますが，これからの二年間も引き続き頑張っていきたいと思っています。これからも何卒ご指導・ご鞭撻の程，宜しく願い申し上げます。



任夢圓 (にん むえん)
博士課程前期入学 (2017年4月)
※ 研究生より進学

2017年4月より博士課程前期に入学した任夢圓 (にん むえん) と申します。2016年10月より，私は研究生の一員として

RIHEでの学習及び研究の貴重な機会を得られることに，深く感謝しております。この半年間，大膳先生をはじめとする諸先生方の丁寧なご指導，及び職員の皆様のご支援により，有意義な生活を過ごさせていただいております。

私は中国の四年制大学生の就職プロセスについて関心を持っております。中国の大卒者が一般企業や国有企業，外資系企業で就職するとき，何を身に着ける必要があるか，どんな方法で現在の仕事を探したか，明らかにしたいと思っております。これから，自分の研究を一層深めて，頑張りたいと思います。また，将来は先生方のように，素晴らしい研究者になりたいと思います。



李涵龍 (り かんりゅう)
博士課程前期入学 (2017年4月)
※ 研究生より進学

私は大学の時，数学を専攻しましたが，関心があるのは数学ではありません。自分は大学に入る前も，入った後も，知識の勉強以外の正確な認識がありませんでした。人生を迷いながら，大切な時間を無駄にしまいました。大学二年生の時，日本語を勉強しはじめました。世の中に自分のやりたいことが沢山あるのを意識しました。日本に留学することを決めたのもその時です。故に，私は，高校生達は迷わず，自分の人生と高等教育を正確に認識した上で大学に入ることを望んでいます。

現在，私の研究テーマは中国の高校生の進路選択です。進路状況とその規定要因，解決方法の解明等に注目しています。そのため，日本と中国を代表とする世界各国の高大接続システムについて勉強し続けています。この先も大膳先生の指導の下，研究室の皆様と一緒に研究していきたいです。



潘秋静 (はん しゅうせい)
博士課程後期入学 (2017年4月)
※ 研究生より進学

こんにちは。今年の4月から博士課程後期に入る中国人留学生の潘秋静と申します。出身地は福建省の厦門です。2016年10

月から研究生としてRIHEで勉強しはじめました。過去の半年間では、村澤先生をはじめセンターの先生方に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。今後も引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

博士段階の研究関心は、修論の研究に引き続き、卒業生調査を通じて「人材育成モデル」と「学習成果」のレリバンスから独立学院における応用型人材育成教育の有用性を検討することです。今後の3・4年間は、RIHEの優れた研究資源・施設を活用しながら、自分の研究を順調に進めたいと考えています。これら研究を通じ、独立学院も含め中国私立大学の質保証及び従来の偏見からその認識と位置づけを正當に評価してもらうことに役に立つことを期待しております。

※上記の方々以外に、2017年4月は松宮慎治さんが博士課程後期に入学されました（前期課程より進学のため省略）。

研究生



王 松嬋（おう しょうせん）

（2017年4月入学／2018年3月滞在予定）
大連理工大学高等教育研究院博士課程後期2年生

この度は、聯合育成博士研究生（特別研究学生）として、貴センターで研究させていただ

き、誠にありがとうございます。この場を借りて、先生方をはじめ、事務室の職員、先輩たちに、心から感謝の意を表します。

現在の研究題目は「博士学位の基準」について、諸国の博士学位の基準の基本内容、形成過程及び構成要素などについてできるだけ詳しく考察し、分析し、関連研究を理論的に深く進めていきたいと思ひます。この素晴らしい環境で、豊かな資料に触れ、研究を推進することに対する自信を一層深めました。これからの一年間、研究も生活ももっと、もっと深めて、少しずつ成長してゆくように頑張りたいと思ひます。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。



陳 禹奇（ちん うき）

（2017年4月入学）

2017年4月より研究生として入学した陳禹奇と申します。広島大学高等教育研究開発センターで学習する機会をいただき、まことにありがとうございます。

今の段階、私にとって、一番重要な目標は来年

2月における試験の合格を目指して、大学院生になることです。これから、しっかり勉強し、より多くの知識を身につけ、目標に向けて、一生懸命頑張ります。このまたとない機会を大切に、視野を広げ、研究を一層深めることを希望しております。今後とも、諸先生方、そして先輩の方々、よろしくご指導のほどお願い申し上げます。

中尾 走（なかお らん）

（2017年4月入学）



初めまして。愛媛大学大学院教育学研究科から来ました中尾走です。下の名前は走と書いて「らん」と読みます。広島大学

高等教育研究開発センターは留学生が多いため、名前から留学生に間違えられそうですが、純粋な日本人です。修士論文では初任者教員のソーシャル・キャピタルに焦点を当て、その効果についての研究を行ってきました。近年、日本の教員養成課程には即戦力となる教員の養成が求められておりますが、世界の動向は学校現場での教育が重要とされています。私はそれぞれの教育効果について検討していきたいと考えています。高等教育研究開発センターの先生の方々、先輩の皆様、そしてサポートして下さる事務室の方々、どうぞよろしくお願い申し上げます。

外国人客員研究員



湯 曉蒙（とう ぎょうもう）

広州大学高等教育研究所准教授／台湾教育政策研究センター副主任
（2016年2月～2017年2月滞在）

広島大学高等教育研究開発センターに来て、1年が経ちました。この一年間で、「日本植民地時代における台湾高等教育史」を巡って、いろいろな研究をしました。特に、台北帝国大学、専門学校と師範学校などの誕生と発展について深く研究して、センターの公開研究会で二回を発表しました。研究だけではなく、日本文化の魅力も色々体験しました。例えば、食文化、お茶文化、お酒文化、温泉文化といったことです。この一年間の訪問期間中、センターの先生方、事務局および学生の皆様からたいへんお世話になりました。皆さんの優しさに非常に感動しています。心より感謝いたします。

これらの記憶は一生忘れられない貴重な体験です。これから、この貴重な経験を生かし、中国で引き続き研究活動に取り組みます。

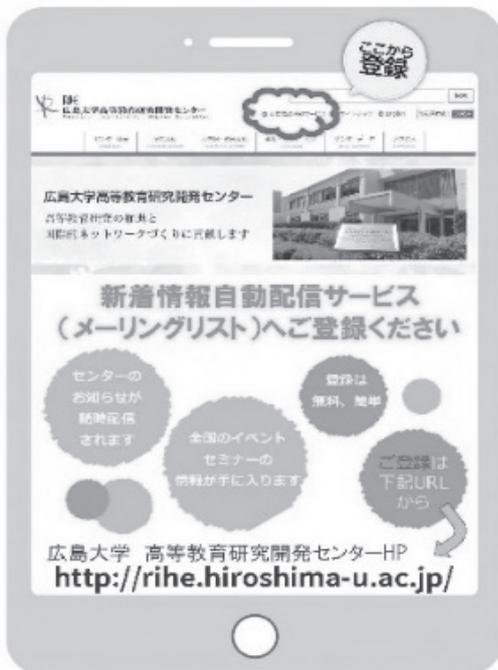
情報調査室だより

今回は、センターホームページの機能紹介及び
情報募集のお知らせです。

登録してください！

自動通知メールは、掲載日の
22：00頃に送信いたします。

新着情報自動配信サービスのご案内



「センターからのお知らせ」や「高等教育に関するお知らせ」が掲載された際、登録されたメールアドレスへ自動でお知らせを配信致します。是非ご活用ください。

登録方法

- ①センター HP 右下新着情報通知サービスをクリック
 - ②アドレス入力⇒登録
 - ③届いたメールを承認のスリーステップで登録完了。
- 詳しくは、センターホームページ
(<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/>) をご確認ください。

高等教育に関する
お知らせ 募集

センターホームページでは、国内外で開催される高等教関係の
セミナーやシンポジウムなど「高等教育に関するお知らせ」を
掲載し、発信しています。

「高等教育のお知らせ」に情報の掲載を希望される方は下記サイトでお申し込みください。

<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/he-contact/>

国内外で開催される高等教育関係のセミナー、シンポジウムの広報が可能です。

